

候處年來相立候義に而骸骨而已故取捨に成候事
右の去丑十二月廿六日落着と云 文政十三寅年記

明治三十五年十月再校了

大鹽平八郎檄文

四海困窮せの天祿永絶えん小人に國家を治しめり災害並到ると昔の聖人深く天下後世の人の君人の臣たる者を誡め被置候故東照神君も鰥寡孤獨におゐて尤憐を加へ候り仁政の基と被仰候し然る處此二百四十年太平之間に追々上たる人驕奢とて驕を極め大切之政事に拘り候諸役人共賄賂を公に授受して贈賈ひ致し奥向女中の因縁を以道徳仁義もなき拙き自分として立身重き役に歴上り一人一家を肥し候工夫のみに心運し其領分知行の民百姓共に過分の入用金申附是迄年貢諸役に甚敷苦む上右之通無體の儀申渡追々入用かさみ候故四海困窮に相成候に付人々上を怨ざる者無き様に成行候得共江戸表より諸國一同右之風儀に落入天子の足利家以來別て御隠居御同様賞罰之柄を御失ひに付平民の怨み何方へ告訴とて告訴る方なき様亂れ候に付人々の怨氣天に通し年々地震火災山も崩れ水も溢れしより外種々様々天災流行遂に五穀飢饉に相成是皆天より深く御誠の難有御告に候得共一向上たる人心も得ず猶小人奸邪の輩大切の政事を執行ひ天下を惱め金米を取立候手段計に相懸り實に以小前百姓の難儀を我等如き草の陰より察し悲み候得共湯王武王の勢位もなく孔子孟子の道徳も無けれの徒に蟄居致し候處此節の米價愈高直に相成大坂之奉行并諸役人共萬物一體の仁を忘れ得手勝手の政道を致し江戸へ廻米之世話致し 天子御在所の京都へ廻米の世話いたさる而已ならず五升壹升斗位の米を買下候者共を召捕扱致し實に昔葛伯と云大名其農人弁當を持參る小兒を殺し候も同様言語同斷何れの土地にても人民之徳川家御支配

の者に無相違處如此隔を附候者全く奉行等の不仁にして其上勝手我儘の觸書等を度々差出大坂市中遊民計を大切に心得候は前にも申通道徳仁義も不存拙き身故にて甚以厚か間敷不届の到り且三都之内大坂の金持共年來諸大名へ貸附け候利足金銀并扶持米等莫大に掠取未曾有之有福に暮り町人の身を以大名の家老用人之格に被取用又自己之田畑新田等を夥敷所持何等之無不足暮し此節の天災天罰を見なから畏もいたさず餓死貧人乞食共敢て不救其身の膏粱の味とて結構の物を食ひ妾宅等へ入込或は揚屋茶屋へ大名家來を誘引參り高價の酒を湯水を飲も同様に致し此難澁の時節に絹服を纏ひ河原者と妓女共に迎ひ平常同様の遊樂に耽り候者何等の事に候哉紂王長夜の酒盛も同事其所の奉行諸役人手に握り候政を以右之者共を取扱下民を救ひ候儀も難出來日々堂島の米相場計を致し候事實に祿盜人にて決て天道聖人之御心に難叶御扱ひ無事に候於是塾居の我等最早堪忍難成湯武の勢ひ孔孟の徳ひなけれども無據天下爲と存し血族の禍ひ侵し此度有志の者と申合下民を惱し苦しめ候諸役人共を誅戮致し引續き奢に長し居候大坂市中金持の町人共を誅戮可致候間右之者共穴藏に貯置候金銀錢并諸藏屋敷内へ隠置候俵米夫々分散配當致し遣し候間攝河泉播之内田畑所持不致者縱令所持致候共父母妻子家内の養方難出來候程の難澁者へ右金米爲取遣候間何日にも大坂市中に騒動起り候と聞得候へ里數を厭す一刻も早く大坂へ向一馳參り候面々へ右米金分遣可申候鉅橋鹿臺の粟財を下民へ被與候御遺意にて當時の饑饉難儀を相救遣し若又其内器量才力等有之者に其々取立不道の者共を征伐致す軍役にし使可申候必一揆蜂起

の企とい違ひ追々年貢諸役に到迄輕致し都て中興神武帝御政道の通り寛仁大度の取扱ひ致し年來驕奢淫逸の風俗も一洗に相改め質素に立戻り四海天恩を難有存し候て父母妻子を取養ひ生前の地獄を救ひ死後の極樂成佛を眼前に爲見遣し堯舜 天照皇太神の時代に復し難けれ共中興の氣象に恢復とて立戻可申候此書付一々村々へ爲知度候得共夥敷事に付最寄人家多き大村の神殿等へ張置候間大坂より廻し有之番人共へ不爲知様心掛早々村々へ相觸可申候萬一番人共見附四ヶ所の奸人共へ注進いたし候様子に候へ無遠慮面々申合せ番人を不殘打殺し可申候若又大騒動起り候と承りなから疑惑致し馳參り不申又ハ遲參に及候得者皆金持之米金火中の灰と相成天下の寶を取失ひ可申候間跡にて必我等を恨み寶を捨て候不道者と陰言不致様爲其一同へ觸爲知候尤是迄地頭村方にある年貢等に拘り候諸記録帳面類の都て引破り焼捨可申候是往々深慮り有事にて人民を困窮爲致不申積に候乍去此度の一舉當朝平將門明智光秀漢土劉裕朱全忠の謀反に類し候と申ものも是非有之道理に有之候得共天下國家を篡盜致し候欲念よりおこり候とに更に無之候日月星辰神鑑有之事にて詰る處の湯武漢高祖明大祖民を吊し天罰を取行ひ候誅心而已にて若疑敷相覺候得者我等所業終る所を爾等篤と眼を開きて見よ

尙々此書付小前之者へ道場坊主或は醫者等より篤と讀爲聞可申候若庄屋年寄眼前之禍を畏れ一己に隠し候へ追て急度其罪を可行候

奉天命致天罰候

攝河泉播村々

庄屋年寄小前百姓共々

天保八丁酉年月日

右本文の文言草書平假名にて認め板行にて摺西之内五枚繼有之上包長サ一尺横二寸計

明治三十五年十月再校了

野里口傳

天保八年十二月大坂町年寄野里四郎左衛門將軍宣下御代替爲御祝儀可申上出府本銀町原口屋某(兵八)方に致滞留居候に付同月十三日呼寄せ件之始末深更まで承り候物語之條々左之通

一 御宮北向八幡宮に御立退之御道筋

御宮より天滿橋南に天滿橋御渡り谷町筋南に眞すく生玉鳥居より西に北向八幡宮御社之傍に兼て御立退之御場所之凡三拾五六町程有之申候

一 平山助次郎返忠いたし山城守様へ訴出候の十八日之夜半に御座候

一 平八郎之叔父大西與五郎に被申付平八郎宅へ罷越様子見届候様被申付候處氣味わるく存候哉同人の不參忤□□を遣見せ候處一向何やらたゞならざる様子故のがれぬ事と思ひ親子とも出奔いたし申候其後攝州有馬の湯治場にて御代官様根本善太夫の手にて被召捕申候事

一 此夜御奉行所に詰居候一味兩人之者被召捕へく山城守様側へ被呼被問詰申開無之小泉淵次郎の逃出しながら脇差を抜候故四五人に面詰所へ追詰被打果候瀬田濟之助の無刀はたしにて庭より稻荷の脇の屏ひくき所より乗越逃出し平八郎へ様子えらせ候處是迄の手筈相違に付にはかにさわき立候哉之事

一 此頃公儀より御救米を割渡有之候而其米減米に御座候而不足故十九日に右之不足分を又々御渡しに相成候日故私も右之御用にて罷出可申心得にて髪月代に取懸り月代を不殘